お母さんの帯

～択捉島出身の長谷川 ヨイさん～

長谷川ヨイさんは、択捉島留別村入里節でお父さんの怡吉さん、お母さんのミヨさん、きょうだい六人の家族九人でコンブやノリを採って生活していました。

ソ連軍は最初は留別に上陸し、山を通って内保に、そして入里節までやってきました。ソ連軍が来るから夜になっても家のカーテンを閉めないようにと通知がきていたそうです。言葉は通じず、銃を何度も撃ってきて恐ろしかったとのこと。家に土足で入り、タンスを勝手にひっくり返して部屋を調べ、時計などの物をくれと言ってきたり、お父さんが家に入ってきたソ連兵に銃を突きつけられながらも、お姉さんをかばったこともあったということです

昭和二十二年八月、突然引き揚げるので今すぐ内保まで来いと言われ、荷造りの余裕もなく食べ物しか持ち出せませんでした。神居古丹に移動して樺太経由で引き揚げてきたのですが、樺太での生活は惨めだったとヨイさんは振り返ります。一畳間ほどの部屋に家族七人で収容され、横にもなれない生活が一ヶ月ほど続き、日本の赤十字の船が迎えに来たときは、子どもも大人も日本に帰れるんだと泣いていたそうです。

お父さんとお母さんの写真（昭和10年頃）
引き揚げ時は写真等を持ち出せず、親戚の家にあったものを貰ったとのこと

この帯はお母さんのミヨさんのものでいつも着物姿でとても明るく優しい人でした。

お母さんは引き揚げ当時に体調を崩しほぼ寝たきりだったので、日本までもたないのではないかととても心配したそうです。引き揚げ後に体調が回復し、昭和五十七年に八十四歳で亡くなるまでお元気だったとのこと。この帯はお母さんの大切な思い出の品とのことです。